

個人別態度構造(PAC)分析によるピア・サポート活動の効果測定の見直し —大学生による中学生へのピア・サポート活動を対象にして—

今野 博信*¹ 池島 徳大*²

A Study of the Measurements of Effects on Peer Support Activities by PAC analysis

Hironobu KONNO Tokuhiko IKEJIMA

本研究では大学生が中学生に対してやや斜めの関係で支援するピア・サポート活動¹⁾に取り組み、サポーターである大学生がどのような意識変容を遂げたかを、個人別態度構造(PAC)分析を用いて検討を試みた。その結果、PAC分析のイメージ評定から、ピア・サポート活動に対するイメージはプラスとマイナスの拮抗状態として示され、また、被調査者同士で想起する項目の共通度の上昇として示された。このような変化は、ピア・サポート活動により個人の認識が表層的なものからより深化したと解釈された。PAC分析によって、個人の変容を詳しく捉えることができ、トレーニングやスーパービジョンに生かしていく実践の積み重ねが期待された。

1 問題と目的

ピア・サポート活動の効果測定には、大きく二つの検討対象が考えられる。一つはサポートを受ける側の効果測定と、もう一つは支援する側(以下、サポーターとする)に対するものである。学校などにおける通常の支援活動では、活動の効果を評価する場合に支援者側の変容を検討することは少ないが、ピア・サポート活動においては、サポーター自身が対象者と同じ生徒同士の関係である場合が多いので、こうした二つの視点をもつことは重要と考えられる。

これまでも多くの研究で、ピア・サポート活動の効果について報告されている(例えば、池島・倉持・橋本・吉村, 2006や、三原, 2006など)。しかし、その内容の多くは、サポートを受ける側とサポーターの区分が明確にされているわけではない。それは、ある意味で当然なわけで、ピア・サポート活動のプログラムが、学校単位や学年・学級単位で実施されることが多いことから、サポートを受ける側とサポーターを一方的に分け隔てることのできない実態があるからである。とはいえ、ピア・サポート活動において、サポーター側にどのような変容が生じてくるのかが明らかにされる必要度は高いと思われる。

それは、変化の記録をもとにトレーニングプログラムを組み直すことができたり、ピア・サポート活動自体の効果測定にも使えたりする可能性があるからである。

ピア・サポート活動の効果測定方法については、いくつか先行研究がある。佐々木(2005)は、高校生を対象にしたトレーニング活動の実践から、ピア・サポート活動の効果の評価方法開発を目的に、3種類の方法を検討している。具体的には、コウイー・シャープ(1997)が提唱したプリテスト・ポストテスト法、自己報告法、事例研究法である。プリテスト・ポストテスト法と自己報告法では、トレーニングを受講した生徒全員に及ぼした効果が把握できること、事例研究法では生徒一人ひとりのトレーニング中の体験が把握できるという利点がある。さらに、いずれかの方法を単独で用いると効果の一側面しか把握できないが、いくつかを組み合わせることで多側面の効果を把握できると提案している。

佐々木(2005)の研究において、効果評価の対象とされているものの一つは、トレーニング場面における、受講した生徒の人間の成長であった。これに関する、個人の変容を記述する事例研究法の有効性への示唆には注目すべきものがある。しかし、一方

* 1 奈良教育大学大学院教育臨床・特別支援教育専修修士課程(現 登別市立鷺別小学校)

* 2 奈良教育大学教育実践総合センター

でその分析（複数でのKJ法によるカテゴリー分類など）に必要とされる労力の大きさから、学校現場などにそぐわない可能性についても述べられている。個人内の変容について、適切な記録と効果測定が可能な評価法の開発が必要とされている現状がある。

ダイナミックな人間的成長に視点をおき、個人の内面の構造を明らかにする技法として、内藤(1993)はPAC分析（個人別態度構造分析：Analysis of Personal Attitude Construct）を開発している。もともとの適用は、カウンセリング場面の個人の変容を見るツールとして想定されていたが、多くの機能をもつことが明らかにされている。井上(1997)は、PAC分析は11の機能を持ち、大きく三つに分類されるという。一つ目は、カウンセリング場面におけるカウンセラーとクライアントの二者関係に着目した分野であり、PAC分析そのものが良好な関係形成を促進するものとして位置づけている。二つ目は、クライアントの問題認識を深めるのに有効で、自己理解を深めさせる働きがあるとしている。三つ目は、客観的なデータ・資料・査定・評価の機能を持ち、有用なアセスメントの道具であることを示している。とくに三つ目の機能に着目して、ピア・サポート活動の効果評価を試みることは、個人内の変容を検討対象とできるので意義深いものがあると考えられる。

そこで、本研究では大学生による中学生へのピア・サポート活動の実践（註に示したように、中学生からの相談に乗ることや会話を通しての関係づくりを主体とした活動で、中学生の学校生活をやや斜めの関係から支える取り組み）に際して、サポーター側の効果評価にPAC分析を用いることにした。ここで対象としたのは、サポーター側の個人内の態度変容とその効果である。このような形で、ピア・サポート活動の効果評価の対象をサポーター側だけに明確にできるのは、貴重な条件といえるだろう。

以上に述べた視点から、本研究の目的を次のように設定した。一つは、ピア・サポート活動に携わった大学生を対象にして、サポーター側としての個人別態度構造の変容を実施前後で比較し、プログラムの効果を検討することであり、二つ目は、サポート活動の効果評価法として、PAC分析の有効性について検討することである。

2 方法

(1) 対象

奈良教育大学（以下本学）の附属中学校生徒に対するピア・サポート活動に応募した大学生（16名）のうち、調査への協力が得られた13名（内訳は、1回生4名、2回生4名、3回生3名、4回生1名、大学院修士課程2回生1名。）性別では、男子学生3名、女子学生10名であった。

(2) 調査時期

ピア・サポート活動開始時期の2005年9月に事前調査、活動の終末期である2006年2月に事後調査、合わせて二回のPAC分析を実施した。

(3) 手続き

対象者を二つのグループに分けた。一つは「友達刺激文」群であり、もう一つは「ピア・サポート刺激文」群（以下PS刺激文群）である。内訳は、友達刺激文群が9名、PS刺激文群が4名であった。

二つの群に分けたのは、どちらの群もピア・サポート活動を体験することになるが、そのことが個人の交友関係に影響を及ぼすかどうかを調べるためと、刺激文が区別されて認識されているかを確かめるためであった。

友達刺激文群には次の内容を刺激文として与えた。「あなたにとって、『友達』とはどんなイメージを思い起こさせるものですか。好ましいものや好ましくないものなど、何でもよいので、浮かんできた順に紙に書いていってください。」PS刺激文群には、『友達』の刺激語を、『ピア・サポート活動』に置き換えて問いかけた（ただし、事前調査の段階ではピア・サポート活動の取り組みが本格化していないことから、便宜的に「中学生からの相談に乗ることや会話を通しての関係づくりをする活動」という説明を加えた）。PAC分析の実施手順は、内藤(2002)に従い表1の通りに行った。

以上の手順において、①～③の過程では、内藤(2002)に準拠しながらも、パーソナルコンピュータによる手順で処理の効率化を図った。この手順は第一筆者が開発したもので、このシステムの利点としては、類似度評定などに要する時間を大幅に短縮し対象者の負担が軽減されることにある。この調査で

表1 PAC分析の実施方法

- ① 対象者のグループ別に主題「友達」と同「ピア・サポート活動」をイメージさせ、単語や文の形で自由想起を求め、思い浮かんだ順にカードに記入させる。
- ② 言葉の意味やイメージがプラスであるかマイナスであるかの方向に関係なく、それらの事項を重要と感ぜられる順にカードを並べ替え番号を打たせる。
- ③ 事項間の類似度距離行列をつくるために、ランダムな順に想起された全ての事項の対について、7段階の評定尺度法で類似度を評定させる。その際、直感的イメージでどの程度似ているか（遠い-近い）を判断し、その距離を数値で答えさせる。
- ④ 上記の方法で類似度距離行列を作成した結果からクラスター分析でデンドログラム（樹状図）を作成する。
- ⑤ デンドログラムに基づいてクラスターを分割し、対象者に、それぞれのクラスターのイメージを聞く。
- ⑥ 各クラスター間の関連イメージや全体イメージから総合的に全体像を描き出す。
- ⑦ その後、対象者から聞きだしたイメージに基づいてクラスターに命名する。
- ⑧ 項目ごとにその内容が、プラスのイメージを起ささせるもの（+）かマイナス（-）なのか、またどちらにも決められない（ちょうど真ん中ぐらいいも含む△）かを評定させる。
- ⑨ 対象者による解釈を経て、調査者の総合解釈を加える。

は、同一対象者に、複数回の調査を依頼することになるので、負担感を持たれないようにすることは協力を確保するためには重要な条件となる。

なお、実際のプログラム開発には、北村・坂本(2004)が推奨し、無償で公開されているプログラム言語のHSP (Hot Soup Processor) を用いている。

手順④では、統計解析ソフト HALWIN を用いた。上述の新開発ソフトで類似度評定値から距離行列作成までを処理し、そこで生成されたデータを HALWIN に読み込ませた後に、ワード法によるクラスター分析を行った。

各調査終了時には、気づいたことや感想を求めて記録した。また調査に際しては、個人情報管理に配慮することや、いつの時点でも調査を中止できることを説明して了承を得た。1回の調査に要した時間は、1時間から1時間半であった。

3 結果と考察

(1) 量的な検討

事前と事後のPAC分析結果から、それぞれ185項目、168項目の合計353項目の反応が得られた(表1の④)。次に、すべての項目について、プラスイメージ(+)かマイナスイメージ(-)、またはどちらでもない(ちょうど真ん中ぐらいいも含む△)の評定がなされた(同②)。この評定結果を指標にして量的な検討を加えた。ただし実際には、想起項目数の多寡に個人差が大きい(6から20まで)ので、個人ごとに評定項目数を全想起項目数で除した割合を算出した。さらに、分散分析には、その比率データを角変換した値を用いた。

友達刺激文群・PS刺激文群と項目のイメージ評定(+と-)の関係を調べるために、前者の刺激文による群分けを被験者間要因、後者のプラス評定とマイナス評定の数を被験者内要因とした分散分析を事前調査と事後調査に分けておこなった。その結果、事後調査においてイメージ評定の主効果 $[F(1,11)=14.47, p<.01]$ と刺激文別と評定との交互作用 $[F(1,11)=16.69, p<.01]$ が有意であった。この交互作用について単純主効果検定をおこなったところ、友達刺激文群で $(+) > (-)$ となるイメージ評定間の差が見られたのに対して $[F(1,11)=31.12, p<.01]$ 、PS刺激文群では差がみとめられなかった $[F(1,11)=.04, n.s.]$

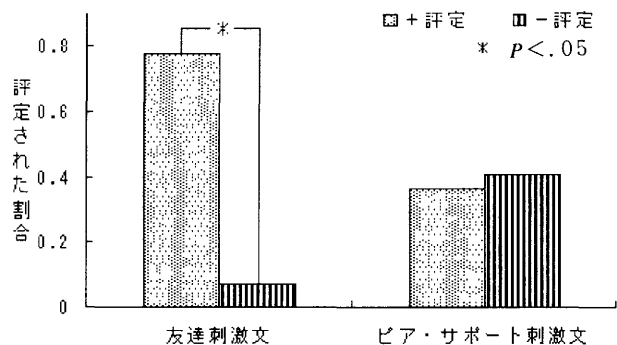


図1 群ごとのイメージ評定の差 (事後)

s.]。この関係を示したのが、図1である。

刺激文が「ピア・サポート活動」とされた場合には、(+)と(-)のイメージが同じような多さで想起されることが明らかになった。この結果からは、刺激文の違いが被調査者によって明確に区別されて認識されていたことが分かる。さらに、友達刺激文群とP S刺激文群の間では、プラス評定での差(友達刺激文群>P S刺激文群)とマイナス評定での差(友達刺激文群<P S刺激文群)が示された。加えて、このような差が事前調査の段階では見られず[F(1,11)=3.19,n.s.]、事後調査の段階でのみ表れたことに注目する必要がある。

中学校でのピア・サポート活動へ大学生がサポーターとしてかかわった経験が、「ピア・サポート活動」に対する認識を深め、ものごとの背景まで含めて考えられるようになった可能性がうかがえる。

どちらでもない(Δ)のイメージ評定を加えた結果からは、有意な差はみとめられなかった。ピア・サポート活動を体験したことでの個人内に見られた特徴は、プラスとマイナスのイメージ評定が拮抗する状態として現れた。この理由については、さらに質的な結果と合わせた考察が必要とされた。

(2) 質的な検討

ピア・サポート活動による影響を、(+)評定と(-)評定との拮抗状態という数量的な記述でとらえることができた。つぎに、想起項目の意味を加えた質的な変化について検討する。

被調査者間で共通する語句を、検討対象として取り上げる。これは、自由連想の際にも定型的な語句が想起される可能性から、被調査者間で共通する程度を指標として用いるためである。その数値の算出までの手順としては、想起項目ごとに適当な語句の単位に切り分け、それが他の被調査者の想起項目中にあるかどうかを検索することから始めた。共通の語句ごとに、その語句への言及があった人数を数え、その語句の共通性の高さとした(表2参照)。

さらに、個人ごとに共通語句が想起項目中に見られる割合を計算し、それを個人ごとの共通度とした。共通する語句が、一つの想起項目に複数含まれる場合があるので、共通度は1を超える場合もあるが、その場合でも1を最大とした。

共通度を指標にして、テーマごとの友達刺激文群

表2 共通性の高い語句の例(割合)

事前	友達	自分	友達	一緒	楽しい	相手	大切	仲間
		0.67	0.67	0.67	0.56	0.56	0.44	0.44
事後	P S	話	相談	相手	聞く			
	活動	0.67	0.67	0.50	0.50			
事前	友達	話	楽しい	大切	仲間			
		0.44	0.44	0.44	0.44			
事後	P S	相談	言う	うれしい	友達	自分	話	
	活動	0.67	0.67	0.67	0.50	0.50	0.50	

・P S刺激文群を被験者間要因、事前事後の調査時期を被験者内要因とする分散分析を行った。その結果、いずれの主効果でも有意差はなかったが、交互作用が有意であった[F(1,11)=6.21,p<.05]。この関係を示したのが、図2である。

この交互作用について単純主効果検定を行ったところ、事後において、友達刺激文群<P S刺激文群に有意差がみとめられた[F(1,22)=6.76,p<.05]。この結果は、ピア・サポート活動をテーマにした場合には共通度が高まることを示しており、何らかの共通体験が影響している可能性が考えられる。その共通する体験として、ピア・サポート活動は当然、考慮に入れなければならないものといえる。

では、どのような語句が、P S刺激文群で共通していたのであろうか。事前調査の段階ではあまり想起されることがなかったのに、事後調査では共通して想起された語句として、「友達」と「うれしい」が挙げられる。この二つの語句のイメージが、事後調査になって、P S刺激文群で想起が促されたということになる。中学生に対してのピア・サポート活動には、「友達」を意識させるような要素が含まれ

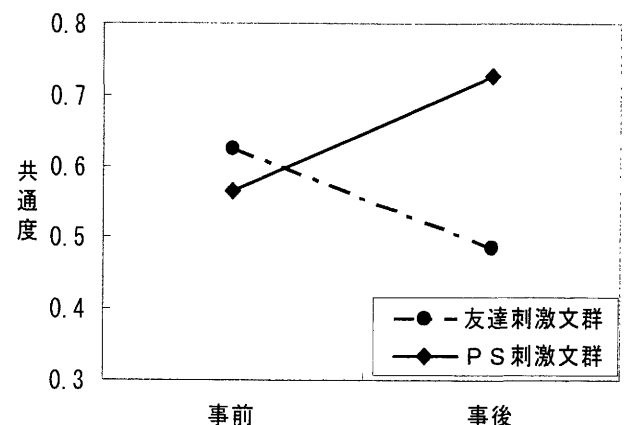


図2 群ごとの時期別に見た共通度の変化

ていた可能性が考えられる。

ところで、「友達」を刺激文にした群については、ピア・サポート活動の影響はまったく及んでいないのであろうか。(+)項目の前後変化を取り上げて、その影響について検討する。

友達刺激文群全体としては、図3のように事前調査よりも事後調査で(+)の評定が増えている例が多く見られるが、他の6名については見られるこの傾向が、3名(図中のX軸上の2, 3, 5)だけには見られない。この3名について、PAC分析の内容と調査終了時に語られた感想をもとに検討すると、つぎのような結果になった。

3名のうち2名(図3の3, 5)は男子学生であり、そのうちの一人は、ピア・サポート活動の感想を次のように述べている。内容は主に、一人の男子中学生との関係づくりで困惑した体験が中心になっている。

「ピア・サポート活動と、このPAC分析で聞かれた『友達』について、合わせて考えたことはない。でも、活動中には中学生を友達として見ようとしていた。中学生から見ると、自分は友達として見られていたかもしれない。しかし、そうはなり切れないで必死になって相手をしていただ部分がある。自分の

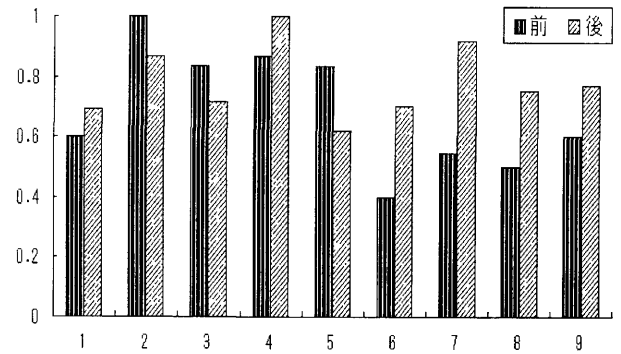


図3 友達群の(+)評定の前後変化

担当時間が終わり約束していた家庭教師のバイトに行こうとした時に、ある男子中学生から、『俺らを放っておいて一人だけ帰るのか』と厳しく言われるなど、辛い思いもしたし・・・しかし、自分としては守備範囲が広がった気がするし、成長があったと思う。中学生にとっても、(自分が)はけ口となれたような気がする。つまりきながらもやってこれたと思う」

この感想からうかがえるのは、ピア・サポート活動は、「友達」を刺激文にしたPAC分析において直接的な連想のつながりをもたないと認識されていても、何らかの形で影響を与えている可能性があるようだ、ということである。ピア・サポート活動の

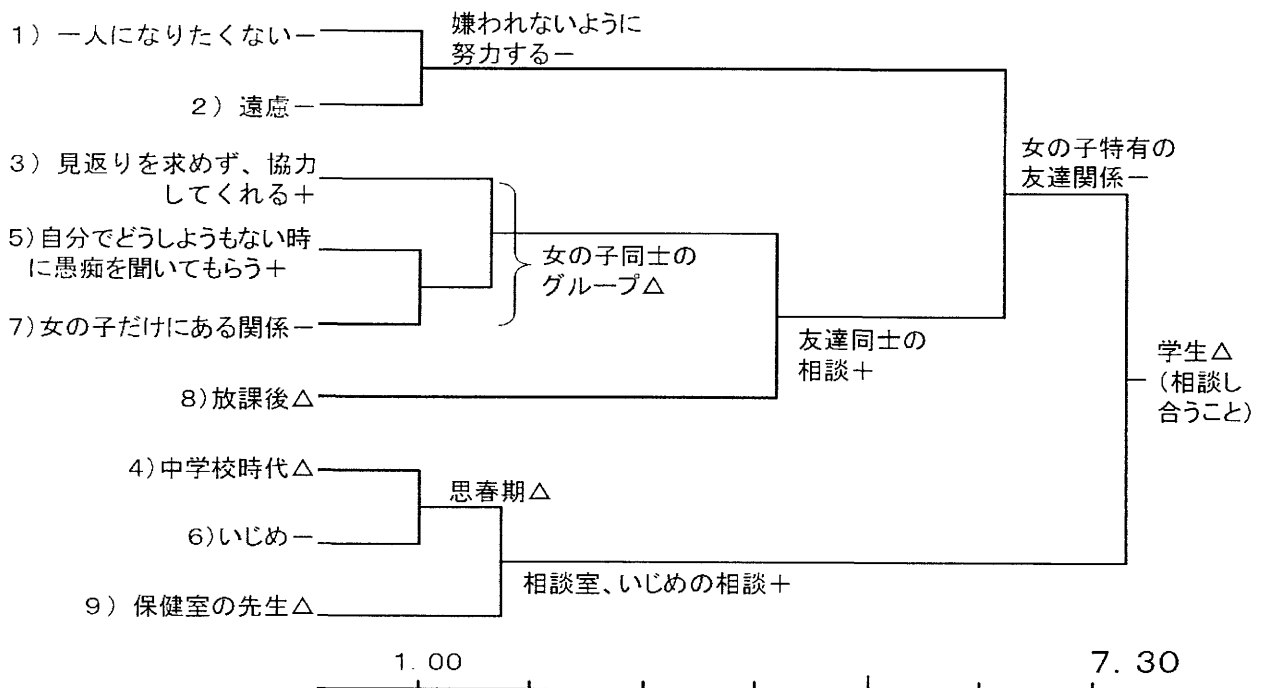


図4 ある女子学生の「相談(ピア・サポート活動)」イメージのデンドログラム (事前)

与えた印象が、事後調査で自分と友達との関係についても振り返りを深めさせたことが想像できる。

もう一人の女子学生(図3の2)は、前年度にもピア・サポート活動に携わった経験をもっていたので、ある程度の余裕をもって活動に取り組んでいたと考えられる。また、PAC分析に臨んでは、刺激文で提示された「友達」と、それに影響するピア・サポート活動の部分を意識的に限定して考えていたことを報告している。具体的には、中学生との友達関係は、「私も役に立ちたい」という項目に現れていると述べていた。それよりも、「アルバイト先での印象(上辺だけの付き合い方)が影響していると思う」と述べ、その結果がプラス評定の減少となって表れたのでは、というように自分を客観視していた。

友達刺激文群においても、特異な傾向を示す反応について調べると、PS刺激文群と通じるピア・サポート活動の影響が見られる例を確かめることができた。

最後に、PS刺激文群での一人の女子学生のデンドログラムの例を図4(事前調査時)と図5(事後調査時)に示す。感想では「ピア・サポート活動は、自分の友人関係や大学生活に少しは影響しているか

もしれない。前よりプラス(の評定)が増えた。見るところが変わって、よいところに目が行くようになった」と述べていた。事前調査に比べて考え方が深まったことの自覚が報告されている。

デンドログラムの比較をすると、事前調査の項目ではプラス評定が2項目、マイナス評定が4項目、どちらでもないの評定が3項目となっている。これに対して事後調査では、プラス評定が4項目に増え、マイナス評定が2項目に減っている。どちらでもないの評定は事前調査と同じ3項目であった。事前事後のどちらでも想起項目数は同じ9項目であることからすれば、このプラス評定とマイナス評定の比率の逆転は本人の報告にもあるように、他者との関係づくりに対する視点の変化として読み取ることができる。

さらに、項目同士を統合させていく過程で命名されたクラスター名について見ると、事前調査では7つの命名がなされ、それぞれのイメージ評定は、プラス評定が2クラスター、マイナス評定が2クラスター、どちらでもないの評定が3クラスターとなっている。同様に事後調査での統合過程を見ると、8つの命名がなされ、プラス評定は5クラスター、マイナス評定は1クラスター、どちらでもないの評定

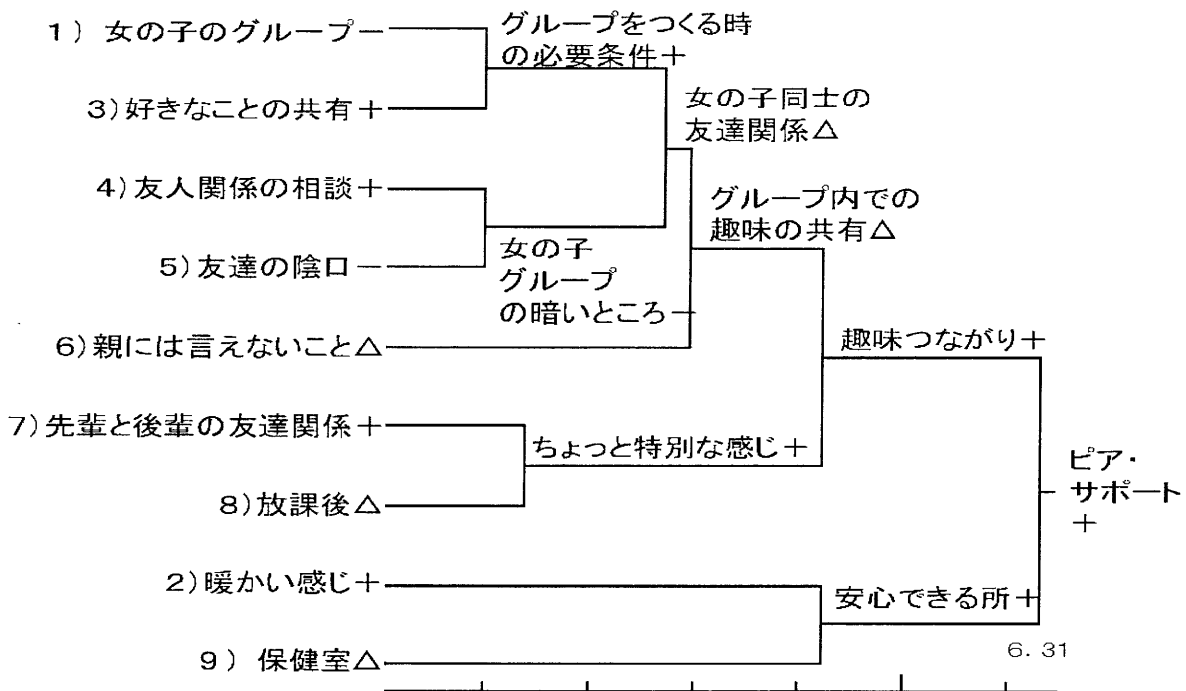


図5 ある女子学生の「相談(ピア・サポー活動)」イメージのデンドログラム(事後)

は2クラスとなっている。クラス数に違いがあるので単純に比較はできないが、プラスマイナスの比率に大きな変化が現れている様子を見て取れる。事後調査では、プラスの評定でクラスターの統合がイメージされることが多くなっていることが示されている。本人の言葉にあるように「よいところに目がいくようになった」ことが示されていると解釈できよう。

この統合過程については、想起された項目そのものを扱うのとは違う視点で検討されるべきものと考えられる。個人がもつ一定の基準で、項目同士が関係づけられていく過程には、項目の印象とは違った複雑な意味づけがなされていると想定できるが、ここでは評定観の変化にだけ着目して検討を加えた。

4 結論

本研究では、中学校でのピア・サポート活動に参加した大学生を対象にして、サポーター側の変容について検討することを目的とした。(+)と(-)のイメージ評定を指標とした量的な検討から、ピア・サポート活動がサポーター個人に影響する事実を描き出せた。具体的には、ピア・サポート活動は、(+)と(-)のイメージを共に喚起させるものであった。このことは、単純にプラスやマイナスのイメージに決められない複雑な思いが、サポーターに生じてきて、深い気づきが促進されたと解釈された。

個人間で共通する語句を指標にして、意味的に分類した質的な検討からは、ピア・サポート活動を体験した者同士が、似たような共通イメージをもつ傾向があることを描き出せた。こうした結果を導き出すことができたPAC分析については、個人の態度変容を深いレベルで受け止めて記述できる可能性が示唆され、もう一つの目的である効果評価法としての有効性を確かめることができたといえよう。今後、PAC分析がもっているカウンセリング機能を、サポーター個人へのスーパーバイズと組み合わせ活用していくことが期待される。

今回の調査では大学生が対象であったが、実際のピア・サポート活動では、小学生同士や中学生、高校生同士での取り組みが基本になる。そのような場合に、このPAC分析が今回と同じような効果をもたらすかどうかについては、未知数な状態である。

また、サポーターの人数が増えるにしたがって、PAC分析を全員に実施することの困難さは増すことになる。特定の個人に限定した実施方法が考えられるが、その際にどのように対象者に選ぶかなどの基準は、未検討なままである。これらの課題は、これから実践例を積み上げていくことで検討されていくことになるはずである。

ただ、小学生へのPAC分析実施については、友生(2002)の研究などが参考になる。小学生の友人関係について、PAC分析を用いた検討がなされている。このことから、ピア・サポート活動の対象者側、つまりサポートを受ける側の変容を記述できる可能性も示唆される。ピア・サポート活動の効果評定には、支援する側と支援される側の両方からの視点が必要であろう。

個人の変容に着目した評価法として、事例研究法が取り上げられてきているが、その評価法に加えて、PAC分析を個人内変容の評価手法の一つとすること、また、数量的な分析方法をとることで一定数の集団の変容も記述できる可能性を検討した。今後も、さらなる検討が加えられるべきと考える。

謝辞 本研究の調査に協力していただいた本学のピア・サポーター学生の皆さん方にお礼申し上げます。また、本研究の機会を与えてくださった大学及び附属中学校の担当者各位に記して感謝申し上げます。

註1 平成17年度奈良教育大学学長裁量経費研究「奈教大生による付属中学校生徒へのピア・サポートプロジェクト」のことで、参加学生を募り実際に中学校に出向いてピア・サポート活動を展開した。中学生からの相談に乗ることや会話を通しての関係づくりを中心にし、学習の補助なども含めた取り組みで、不登校気味の生徒や対人関係づくりに困難を抱える生徒達を支える活動に取り組んだ。

サポーターとしてのトレーニングには、夏期冬期の2回の合宿時には自己理解や相互理解を深めるための講義や、コミュニケーションスキルを高めるための各種のアクティビティ、対立解消についてのワークなどの実習をしたり、相互に体験事例を交流し合うなどの機会をもった。

また、全員参加で開催される毎月定例のケース会議や個別に時間をとっての面談などの場で、こまめにスーパービジョンが与えられる環境が整えられていた。

参考・引用文献

- コウイーH・シャープS 1997学校でのピア・カウンセリング
川島書房
- 池島徳大・倉持裕二・橋本宗和・吉村ふくよ 2006 子ども同士のもめごと・対立問題への介入方略に関する学校教育臨床事例研究 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要15, 181-188
- 井上孝代 1998 カウンセリングにおけるPAC（個人別態度構造）分析の効果 心理学研究, 69, 4, 295-303
- 北村英哉・坂本正浩 2004 パーソナルコンピュータによる心理学実験 ナカニシヤ出版第6章
- 三原正司 2006 小学校におけるピア・サポート活動の効果に関する研究, ピア・サポート研究, 3, 9-20
- 内藤哲雄 1993 個人別態度構造分析について人文科学論集, 27, 43-69
- 内藤哲雄 2002 PAC分析実施法入門 [改訂版]「個」を科学する新技法への招待 ナカニシヤ出版
- 佐々木祥子 2005 高校生を対象としたピア・サポートトレーニングの効果評価法の見直しピア・サポート研究, 2, 15-24
- 友生雅夫 2002 児童の個人別態度構造の変容についての研究(3):クラス編成後一年間の友人関係の変容の分析 日本教育心理学会総会発表論文集 (44), 313